地人館
E-books

デモ版 pdf

山河を越えて　心のガイドブック

観音霊場巡拝記 3

# 坂東三十三札所

酒本幸祐 著

# 酒本幸祐さんの巡拝記――刊行にあたって

地人館代表　大角 修

酒本幸祐さんは六月書房という出版社の社長をしながら、故郷の四国八十八ヶ所をはじめ、あちこちの寺社詣でを欠かさない。２００４年４月には、西国・坂東・秩父に加えて鎌倉三十三観音巡拝の記録『菩薩の風景　日本百観音霊場巡拝記』を上梓された。本書はそのなかの坂東巡礼の部分を再編集したものである。

ところで近年、霊感スポット、スピリチュアル、御朱印集めといった言葉とともに、寺社参りの人気が高まっているという。観音札所についても、各地の霊場会のサイトをはじめ、各種の旅行ガイドブックなどで盛んに紹介されている。にもかかわらず、もう20年も前に刊行された観音霊場巡拝記を再刊したのは、昔から庶民の楽しみだった「信心の旅」の感覚がよみがえるように思われたからである。

酒本さんは古い友人であるが、とりわけ信心深いようでもなく、何か特定の信仰をされているわけでもない。そんな強い信仰ではなく、素朴に神仏に礼拝するところに味わいがある。

たとえば、「第十四番　瑞応山弘明寺」の項に次のようにいう。

「堂内外陣で参拝したが、本堂の奥に身丈六尺の十一面観音像を見ることができた。本尊が見え

るということは、凡夫（ぼんぶ）にとって実に嬉しくありがたいもので、読む経にも必然力が入る。巡拝二日目の無事を願い、結願、諸願の成就を祈りつつ経を読んだ」

また、「第二十三番　佐白山正福寺」の項に次の文がある。

「本尊の前に坐して読む経は、いつものことながらありがたく、観音様へすっと思いが伝わるようだった」

この「諸願成就を祈りつつ」「ありがたく、観音様へすっと思いが伝わるようだ」といった感覚を近年流行の寺社参りの人はもつことができるだろうか。観音堂の前で撮ったVサインの写真をメールで送る世代には、もしかしたら、消えてしまった感覚かも知れない。といって、霊的なものへの関心は消えない。昔は庶民の健全な娯楽だった寺社参りから「もったいない」「ありがたい」という素朴な感覚が失われたとき、その心の空白に霊感とか怨霊とか、カルトの恐怖がしのびよってきても不思議ではない。

この不安の時代に酒本幸祐さんの巡拝記は、ほどよく信心深くて貴重なものである。

**第一番・大蔵山杉本寺**　杉本寺は、734 年に聖武天皇の后である光明皇后の発願で、藤原房前、行基によって建立された。三体の本尊は、行基、円仁、源信がつくった十一面観音菩薩像である。

**第三十一番・大悲山笠森寺**　笠森寺は、784 年に伝教大師最澄が楠の霊木で十一面観音菩薩像を彫り、安置したことに始まるといわれている。写真は、岩の上に建てられた観音堂。61 本の柱で支えられた「四方懸造り」といわれる構造で、日本唯一の建築様式として国宝に指定されている。

坂東三十三観音朱印帖

坂東三十三観音朱印軸

百観音朱印軸（秩父、西国、坂東）

# 坂東札所巡礼へ

昨春、四月初旬に西国三十三観音霊場の巡拝結願をなし、ようやく一年半を経て坂東三十三観音霊場巡拝に出発することができたのは、平成十五年九月二十三日であった。

一昨年の秋には秩父三十四観音霊場巡拝の結願をなしている私にとって、坂東三十三観音霊場は、日本三大観音霊場、百観音巡拝成満という、大きな意味をもつ巡拝であった。

西国三十三観音巡拝を結願した時、徳島に住む同行のOさんと、昨秋に秩父、坂東観音霊場の巡拝を約束して別れた。私は秩父霊場はいちど単独で巡拝していたが、再度Oさんと巡拝する予定であった。早く三大観音霊場、百観音の巡拝を果したいと、気持ちは高まるのであるが、巡拝予定の秋になっても、私とOさんの仕事の都合がどうしても合わないまま秋が深まっていった。丁度その年の秋は、秩父観音霊場は十二年に一度の総御開扉の年であり、巡拝の予定を何度も電話で打ち合わせたが、ついに年が暮れてしまって、来春ということになった。しみじみと観音霊場の遠いことを感じたものだった。

翌年になって、山桜も咲き始めているのに、どうしても私の仕事の都合がつかない。風薫る五月になっても、私の事情は全く変らない。電話で打ち合わせるOさんの声のなかに、どこかジレ

た雰囲気を感じた。Oさんは多忙な仕事をやりくりして、五月の連休明けに時間を都合していたのだった。私も極力合せようと努力したが、結局のところ見送ることになってしまった。私にとって観音霊場は実に遠いのであった。

五月の末になって、Oさんから電話があって、「秩父を一人で巡拝して来ました」という。私はすでに秩父霊場の巡拝を結願しているので、一人で廻ることにしたというのだ。「気持ちは観音霊場に飛んでいて、もう押さえられなかったんですよ。これで今度の坂東三十三観音霊場巡拝が、二人にとって悲願の百観音霊場巡拝成満となりますね」といった。それを聞いた時、申し訳なく思うと同時に、徳島から車を走らせて秩父に向かうOさんの姿が浮かんできた。今度こそはと、坂東三十三観音霊場巡拝の結願を強く思った。

夏が来て、旧盆を含めての坂東観音霊場巡拝の計画を考えていたが、今度はOさんの都合が悪かった。彼は阿波踊りの名手らしく、旧盆は徳島で踊り続けるのだという。

初秋となって、ついに九月二十三日から予備日も含めて八日間の巡拝スケジュールが一致して、めでたくも坂東三十三観音霊場巡拝が決定した。

巡拝出発までの前書きが長くなってしまったが、これはこれなりに意味があり、ご容赦いただきたい。日本三大観音霊場、百観音巡拝と一口にいうが、出発前の準備もふくめ、なかなか大変なことなのである。巡拝していると、数ヶ寺の境内で、「西国、坂東、秩父百観音巡拝成満の碑」を見かけたが、記念碑を建てるほど大変なことなのだと、今は深く理解している。坂東三十三観

音霊場巡拝中にこの碑を見付けると、自然と手を合せたものだった。今、無事に百観音巡拝を終えて、日が経つほどに、しみじみとありがたいのである。

出発に当っては、関東に住む私が基本日程を作ることになった。ガイドブック、道路地図を見ながら、実質五日間の予定をたてた。朝駆け、夜駆けを得意とするOさんの行動パターンを加味したものであったが、実際には七日間を必要とした。無駄な走行もあったが、一番札所から三十三番札所まで約千八百三十一キロを走り、市街地での交通渋滞、山間部の山越えなど、坂東観音霊場はなかなか厳しい巡拝であった。

巡拝に先立って、坂東観音霊場の概略を書くこととする。

坂東三十三観音霊場の制定は定かではないが、古文書から天福二年（一二三四）鎌倉時代前期には制定されていたことが分かる。西国三十三観音霊場が、花山法皇（在位九八四～九八六年）の再興（創始ともいう）といわれていることから推測すると、西国観音霊場より二、三百年遅れて坂東観音霊場が成立したことになる。

坂東観音霊場を制定したのは三代将軍源実朝（みなもとのさねとも）といわれているが、実は源頼朝（みなもとのよりとも）は観音信仰に篤く、鎌倉幕府の成立とともに、西国観音霊場に倣（なら）った観音霊場を考えていたらしく、各地の豪族などに観世音菩薩を本尊とする寺を推挙させている。このことが実朝の代になって観音霊場の制定につながったものと考えられる。また、観音霊場制定の背景には、新しく成立した鎌倉幕府に、京の文化を移入するねらいや、戦乱によって衰退した寺院の復興、保護、民心の平和をは

かるという政策もあったようにもみえる。
地域的には鎌倉幕府膝元の神奈川県鎌倉から始まり、神奈川県、東京都、埼玉県、群馬県、栃木県、茨城県、千葉県と七都県にわたって、東京湾を囲む形で広がっている。観音霊場札所に制定された寺院のある範囲が、だいたい当時の鎌倉幕府の勢力範囲であったのだろう。
さて、いよいよ坂東三十三観音霊場の巡拝に出発することにする。

## 九月二十三日。巡拝前日。晴。

この日は彼岸の中日であるが、夕刻に神奈川県の大船駅近くのホテルでOさんと合流することになっていた。Oさんは早朝に徳島市内の自宅を出て、長駆、大船駅に向かうことで、この日から厳しい巡拝が始まったことになる。私の方は午前中に墓参りをし、坂東三十三観音霊場巡拝への出発の報告、無事の結願を願って、心の準備をととのえた。待ちに待った坂東三十三観音霊場巡拝出発の日だけに、心がスキップする感覚があった。
大船のホテルはＪＲが経営していて、鎌倉三十三観音霊場巡拝の折にもお世話になり、新しく感じのよいホテルである。何よりもこのホテルは大船の小高い山の頂上に建てられていて、大きな白衣の観音様を見上げる位置にあり、観音霊場巡拝をする者にとって、これほどありがたいホテルはない。

夕刻、私が大船駅に到着すると、見事なタイミングで私の携帯電話が鳴った。Oさんからである。出発日までの不手際が嘘のような順調さである。早くも観音様のご利益が具現しつつあることを感じた。ところが、電話では「茶色の建物ですね」とホテルを確認していたはずなのに、ホテルのロビーで待つ私の前に現れない。後で聞けば、線路沿いにあるホテルを、線路を挟んだ反対側の道路から眺めていたのだ。目と鼻の先まで来ていながら、線路を渡る迂回路を探すこと、市街地ゆえの交通渋滞で時間を要したとのことだった。これが車で巡拝する巡礼者にとっての妨げともなる。観音様はすでに、今回の巡拝における障害を示して下さっていたのであった。

久しぶりに会うOさんは、ラグビーで鍛えた体躯を陽焼けさせ、一段と逞しく感じた。ともかく、再会を祝し無事の巡拝結願を願って乾杯となった。二人にとって今回の坂東三十三観音霊場は、百観音巡拝成満が目的だけに力が入っているのだった。

食事をしながら日程の確認をしたが、私が持つ坂東三十三観音朱印軸には三十四の枠があり、一ヶ寺を番外として加えなければ軸が完結しない。Oさんが最初から持ち歩いている百観音軸は百六の枠があり、西国霊場の番外寺を加えても三枠余ることになる。一般的には、長野の善光寺を入れるのであるが、二人とも西国三十三観音霊場巡拝の時に善光寺が入っていて重複となる。そこで百観音巡拝が成満の後、善光寺とともにお礼参りに行くといわれる長野県上田市の北向観音（きたむきかんのん）を番外として加えることとした。北向観音は、今回の坂東観音霊場のコースからは大きく外れることになり、高速道路を走っても、ほぼ一日の日程が増えることとなる。ともかく、ありがた

いことは全て行うということで意見が一致した。
私としては鎌倉、坂東観音霊場巡拝を見守って下さった大船観音の朱印を戴きたいと思ったりしたが、私の掛軸に残された枠は一つであり、どちらを選ぶかは観音様のお心に任せることにした。Oさんの掛軸の残り枠は三つであり両方の朱印を受けても大丈夫である。
巡拝スケジュールの確認を終え、翌朝からの巡拝開始のため、早目にホテルに帰った。ホテルの部屋からはライトアップされた白衣の大船観音が見え、美しくもありがたかった。

**九月二十四日。巡拝一日目。晴、夕方より小雨。**

七時三十分ホテルを出発。天気にも恵まれて、気持ちも充実している。元来、晴れ男の私は雨についての心配は全くしていない。以前の西国観音霊場巡拝の折も、「春に三日の天気なし」といわれる季節であったが、天気には恵まれ、雨が降っていても車から下りて参拝する時は不思議と雨が止んだ。
目指す大船観音は、ＪＲ東海道線、横須賀が平行して通る広い軌道の向こう側の山の上に見えている。迂回して軌道を渡ればすぐそこである。ところが出勤や通学の時間帯とあって、渋滞で車が進まない。やっとの思いで観音様が座す山の下まで着いたのであるが、進入路が見当らない。これほど立派な観音様があるのだから、どこか車の入る道はあるはずだと、山裾を行き来するも

無い。強引に住宅地らしきところから進入したが、道は細かったり行き止まったりで、目の前に観音様が見えるのにどうしようもない。このような場合、Oさん自慢の愛車に装備されたカーナビも全く役に立たない。やっと見つけた寺への参道は予想外に狭く、軽自動車が登れるほどで、Oさんの車では進入不可能であった。

徒歩で登るにしても、車をどこかの駐車場に入れなければ、他人の通行の妨害となる。再び細い道を出て、かなり離れた山の裏手の駐車場へ移動。徒歩で山上部の寺の山門に着くまでに四十分程も要した。

山門を入るときれいに掃かれた白い玉砂利の庭の先に、寺務所、本堂があり、多勢の僧侶の読経が聞こえてきた。観音様は庭から仰ぎ見るような位置にあった。寺の方に朱印をお願いしたが、現在勤行中で朱印ができないという。待ってもまだ暫く時間がかかるという。

せっかく訪ねたが、巡拝初日の後の行程を考えれば、諦らめざるを得ないということになって、大きな白衣観音様に手を合せて寺を後にした。

カーナビに一番・杉本寺を入れると、十三キロと距離が表示された。交通渋滞さえなければすぐに着くはずであるが、鎌倉市街は交通渋滞が激しいことでも知られている。

北鎌倉駅前の円覚寺の前を通り、建長寺を過ぎると、いよいよ鎌倉市街へと進む。杉本寺は以前に巡拝した鎌倉三十三観音霊場の一番札所ともなっていて、私の中にはしっかりインプットされている。ただ以前は歩いて巡拝しただけに駐車場の有無の記憶がない。杉本寺前の金沢街道

は道幅も狭く、駐車場を探すのは大変だろうとは思っていた。

鎌倉八幡宮（かまくらはちまんぐう）の赤い大鳥居が見えてきた。一礼するだけで通過し、金沢街道に入る。駐車場を注意しながら進むが、ついに見覚えのある「十一面観世音」と白地に墨書されたノボリの林立する寺の前を通過してしまった。暫く走ると左手に、大型バス五台ほども駐車できる駐車場があった。Oさんはすかさず駐車場に入ったが、迷うことなく車をUターンさせ、再び金沢街道を戻りはじめた。「うん」と思ったが一瞬のことであった。車が入るなり、駐車場入口の仮設小屋から料金徴収に出てきた老人の態度が気に入らなかったのか、寺まで遠いと判断したのかは聞かなかった。再び寺の前を通過して駐車場を探したが、ますます見付けることができない。また車はUターン、三度続けて寺の前を通り、元の駐車場に入った。駐車料金五百円也。

余談であり、寺とは関係はないことながら、駐車料金を払う時に小さな怒りを覚える。巡礼者にとって寺での滞在時間は長くて三十分程である。しかるに少々高くはないかということである。このことは西国観音霊場巡拝の時、嫌になるほど感じたことでもある。ひどい駐車場では七百円というのもあった。「高くても駐車しなければ参拝できないだろう」という、この心根に腹が立つのである。さすが駐車場の経営者も仏罰を恐れてか、料金設定には一日駐車料金と書いているところがほとんどである。「一日駐めて五百円は安かろう」という口上である。寺の滞在時間の短い巡礼者しか利用しない駐車場で、一日駐車。

余談ついでに、この足元を見る商売は寺近くの駐車場の経営者だけでなく、国が率先してやっ

ている。煙草税、酒税である。ことに煙草税は、以前は国が煙草を製造して売り、税金を取り、中毒患者をつくっておいて、民営化にしても税金だけは取る。国の税収が足りなくなれば、中毒患者に増税して、足元を見透して税を取る。

巡礼中は心おだやかに、怒りの心をもってはいけないということを忘れかけていた。杉本寺へ急ごう。

# 第一番　大蔵山杉本寺（だいぞうざんすぎもとでら）

神奈川県鎌倉市二階堂九〇三
天台宗
本尊・十一面観世音菩薩
創建・七三四年
開基・行基

金沢街道から道幅の狭い参道に入ると、参道の左右に立つ「十一面観世音」と書かれた白いノボリが印象的だ。本堂は正面の数十段の石段を登った所にある。途中、運慶（うんけい）作と伝わる仁王像のある江戸時代中期の仁王門をくぐると、境内に着く。狭い境内中央に、高床式で茅葺き屋根、五間四面の素朴な本堂が見える。本堂は延宝六年（一六七八）の再建で、木肌の表面からその時の流れが見える。驚いたのは、ちょうど一年前に訪ねた時は、本堂の前庭が広かったと思ったが、実に狭いのである。しみじみと人間の記憶の不確かさを思った。

今日はまだ参拝者が来ていなく、きれいに均（なら）された香炉の灰の中に線香を立て、灯明を灯す。

すがすがしい気分で、いよいよ坂東三十三観音霊場巡拝の始まったことを覚えた。

杉本寺は、納経所も本堂の中にあり、靴をぬぎ内陣に座して経を唱えることができる。前立の十一面観世音菩薩は源頼朝の寄進になり、本尊を前に座して読む経は、諸願が観音様に真っ直ぐに伝わるようで、嬉しくもあり、ありがたいものである。勿論、今回の霊場巡拝の無事と、諸願、心願の成就を切に祈った。

寺の方に教えられて、壇上に上がり、前立本尊の裏側に廻ると、本堂の奥の方に、「三尊同殿」といわれる三体を並べて祀っている本尊を、薄暗い中に見ることができる。はっきりと見えなくとも、肉眼で本尊を見ることは、信仰心が高められるものである。

三体の本尊である十一面観世音菩薩について縁起を見ると、向って左側が寺の開基である行基の作、中央が慈覚大師（円仁）作、右が恵心僧都（源信）作だという。中央、右の二体が国の重要文化財になっている。この他、運慶作と伝わる観世音菩薩の三十三化身仏などもあり、寺歴の古さが伝わってくる。

杉本寺を後にして、二番・岩殿寺へ向かう。岩殿寺までは四キロほどの距離で、逗子市郊外の住宅街を見下ろす山麓にあった。山懐に抱かれるように、静かな落ち着いた寺である。

# 第二番　海雲山岩殿寺（かいうんざんがんでんじ）

神奈川県逗子市久木五―七―一一
曹洞宗
本尊・十一面観世音菩薩
創建・七二一年
開基・行基、徳道（とくどう）上人

植栽の美しい二十数段の石段を登ると、徳川家康（とくがわいえやす）の修復になるという、小ぶりながら時代を感じさせる山門がある。境内は左右から山に挟まれた地形で、平地は少ない。左手に庫裡（くり）、納経所があり、和風庭園の趣きがある静かな景観である。納経所の前方に日本三大観音霊場である「坂東、西国、秩父、百観音巡拝成満の碑」が建っていたが、我々も今その途中にあり、特別の感慨があった。また、泉鏡花（いずみきょうか）の直筆になる

普門品（ふもんぼん）ひねもす雨の桜かな

の句碑もあった。

観音堂は、そこから急な百三十段ほどの石段を登ったところにある。階段途中には、弘法大師が爪で彫ったと伝えられる爪彫り地蔵があった。

銅葺き屋根の四間四面の観音堂は、比較的新しい再建であろうが、山に囲まれ、風景と一体となっている。この堂の裏手に奥之院と記された岩窟があり、ここに行基が彫ったといわれる十一面観音の石像がある。この岩窟が「天の岩戸」とも呼ばれる岩殿で、寺名の由来ともなっている。

源頼朝の帰依（きえ）も深く、頼朝が石橋山の戦いに敗れて、真鶴岬から房総半島に船で逃れる時、観音様が船頭となって助けたという伝説も残っている。

観音堂での参拝を終え、振り返ると、左右の山に挟まれた扇状地に建ち並ぶ住宅の向こうに、逗子の海が明るく開け、美しい景色となっていた。

風渡る秋天の光逗子の海

三題噺のような句をひねって次へ急いだ。

# 番外　北向観音（きたむきかんのん）

長野県上田市別所温泉一六五六
天台宗
本尊・千手観世音菩薩
創建・八二五年
開基・慈覚大師（じかくだいし）

北向観音はどの観音霊場にも入っていないが、観音霊場巡拝が結願すると、そのお礼に、長野の善光寺（ぜんこうじ）と北向観音に参拝するという習わしがある。江戸時代には盛んにお礼参りの巡礼者が訪ねたという。我々も巡拝途中であるが、参拝を先にすることとした。

北向観音は、同じ長野県の北方にある善光寺と向かい合う格好で建ち、北斗七星に向いて建っていることから、北向観音と呼ばれるようになった。

寺伝によると、この地に大噴火が起こり、それを鎮めるために慈覚大師が秘法を修すると、火は治まり跡に観音像が現われ、温泉が湧き出したという。そこで慈覚大師が千手観音像を彫り、

その胎内に出現した観音像を納め一宇を建てたのが始まりだという。北向観音の本坊は常楽寺で、同じく別所温泉にある。

その後、平維茂が一山を修理して三楽寺、四院、六十坊を増築したが、寿永元年（一一八二）に木曽義仲の戦乱で焼失することとなる。再び源頼朝の命により復興され、その後も塩田陸奥守北条氏により再々興される。

関越自動車道から上越自動車道に入ると、車の数は一段と少なくなる。ネギで有名な下仁田辺りから大きく右にカーブして、山中へと入っていく。左手に独特の山形をした妙義山が見え、群馬、長野の県境にある八風山トンネルに入る。この辺りは短いトンネルが多いが、この八風山トンネルは実に長いのである。全長四千四百七十メートルもあり、中央部に県境を示す標示がある。走っても走っても出口が見えない。長いトンネルに恐怖心がめばえ始めた頃に、トンネルを抜けるという感じである。確かにトンネルは便利なものであるが、あまり長いトンネルは気持ちのよいものではない。

長いトンネルを抜けると、道はひたすら下り坂となる。左手下方に佐久平、小諸、そして上田へと続く家並みが見える。見晴らしは実に素晴らしい、道路脇にはリンゴ園や、刈り取り前の黄金色の水田が点在し、道路が高い所にあるため、空の上の道を走っているような、不思議な感覚である。

そこで一句、

秋天や赤きリンゴと稲穂かな

上田のインターを出ると、今度は山腹から一気に駆け下りる感じで上田市街に入る。そこから別所温泉へと向かう。道の左右に土産物店や、旅館の看板が目立ちはじめると、別所温泉入口に到着。午後一時十分。

北向観音は温泉街を抜けた、突きあたりにある。私は二十年ほど昔、この温泉に泊ったことがあり、景色の記憶はないが、雰囲気はほとんど変っていなかった。観音下の一日五百円の駐車場から、石段を登り境内に入ると、正面に二層屋根の五間四面ほどの観音堂がある。温泉場にあるためだけではなかろうか、どこか庶民的で、なごやかな空気があった。狭い境内に観音堂を中心に不動堂、薬師堂、愛染堂が建つ、小じんまりとした親しみのある寺である。

参拝を終わって遅い昼食となった。私は長野県でおいしい蕎麦（そば）に当ったことがないが、Oさんは「信州そば」のイメージに期待しているらしく、その思いを叶えようと蕎麦屋を探した。寺の前は短い商店街になっていて、土産物屋が並んでいる。その外れ、門前を流れる谷の横に小さな蕎麦屋があった。こういう小さな店がおいしいのだと、私はOさんを誘った。入口は狭いが奥に長い店で、客は一人もいない。昨晩の回転寿司を思い出したが、出ることができないまま座った。中年夫婦で商っているのだが、どこか意味ありげな二人であった。一見して女性は姐さんぽく、

素人とは思えない雰囲気で、調理場の男性は見るからに不器用で気の弱そうな風貌である。織田作之助の『夫婦善哉』を連想した。

運ばれた天ぷら蕎麦は、見ただけでOさんは黙してしまった。私も黙した。観光地の、値段は一流、味は三流を絵に描いたようだった。料金を払う時、私は再び深く黙した。駐車場に向かう途中の土産物店で、口直しに信州名物「おやき」を求めたが、二人はまた黙すことになり、黙々と車中の人となった。

次は十五番・長谷寺である。この寺からほぼ札所順の巡拝となる。逆打ちの連続だったせいでもないが、なかなか巡拝に手間取っている。やはり坂東観音霊場は西国観音霊場と比べて、地域も広くなかなか厳しいのである。

さて長谷寺へは上信越自動車道を戻り、再び関越自動車道を北進し、前橋インターに出るコースをとる。

人間の感覚とは不思議なもので、初めて通る道はその風景も新鮮で長く感じるが、戻りの道は早いものである。上田市街からどんどん登って、八風山トンネルを抜け、どんどん下って下仁田まで戻ってきた。下仁田を過ぎるとカーナビは「出口まで五百メートルです。左に寄って下さい」と高速道路を下ろそうと誘導する。Oさんは「どうします」と聞く。私はカーナビの力は知っているが、あまり信じていない。私の頭の中には、ガイドブックに書かれていた「長谷寺へは関越自動車道・前橋インターを出る」との記事が刷り込まれていたのだ。

再び出口が近づくと、カーナビは高速道路を下りるよう誘導する。無視した。カーナビは黙った。「馬鹿、教えた通り走れ」とはいわないのである。カーナビは拗ねたように黙って、次の道を探すのである。

三度目に、カーナビが高速を下りるよう誘導した。Oさんは再度「どうします」と聞く。「このままでいいんじゃない」と私は答えたが、いくら頭の固い私でも、少し頭をひねった。ガイドブックの地図を開けてみた。今走っている上信越自動車道は、ほぼ直角に関越自動車道と合流する。そして九十度の角度で関越自動車道を北上し、前橋インターで下りて、進行方向左方向に長谷寺はある。すると、今走っている上信越自動車道の左側の方向に長谷寺はあることになる。

そのことを理解した私の脳は、汗をふきだした。恐る恐るこの事実をOさんに話すと、カーナビに何度か痛い目に会っている彼は、ニヤッと笑って「予定通りに行きましょう」とやさしいのである。すでに左に下りる出口がなくなったのか、気分を悪くしたのか、カーナビは左への誘導をやめてしまった。高速道路を走っているため、時間的には二十分ほどだろうが、距離は三十キロ以上はロスしているだろう。

前橋インターに向かいながら、カーナビのもつ底力に感服しきりであった。私自身、少々カーナビを軽視していたようだ。この機械を信頼するOさんは、私と同じ思いをしたことがあるのだろう。

# 第三十三番　補陀洛山那古寺（ふだらくさんなごじ）

千葉県館山市那古一一二五
真言宗智山派
本尊・千手観世音菩薩
創建・七一七年
開基・行基

納経所に着いて「百観音の巡拝を成満しました」といいつつ、朱印帖と軸を受付けに出したが、そこにいた五十半ばの女性職員は、我々の方を一瞥しただけで何の反応もない。我々は百観音を成満できたとの喜びを、体全体で表現していたのだが、そのそっけない対応に愕然とした。「おめでとう」という言葉を勝手に想像していたのである。寺の職員にすると、結願の寺なのだから、とりたてて珍しいことではない。自分たちが勝手に思い込んでいただけなのであるが、冷水をかけられた気持ちではあった。

二人で顔を見合せていると、納経所に若い僧侶の方が入って来て、我々の軸を見るなり「結願

おめでとうございます」と笑顔でいってくれた。その言葉で我々は救われた。じわーっと嬉しさがこみ上げてくるのを感じた。女性職員の方は軸に朱印を押しながら、終始無表情、無言である。大変失礼ではあるが、この女性は結願の寺の納経所で働く職員としては、適性を欠くのではないかとも思った。

納経所で朱印をいただくと五時近くになっていた。さきほどの僧侶の方にお願いして、納経所前で二人並んで記念写真を撮ってもらって、本堂へ向った。

本堂は駐車場のある納経所より一段高いところにあり、東京湾が一望できるところにあった。本堂に着くと、堂は周囲に足場が組まれ、すっぽりと工事用のパネルで覆われていて、入口も閉められていた。工事現場の人に聞くと、本堂は大改修が始っているのだという。朝八時から午後五時前までであれば、本堂内に入って参拝できるということなので、本日は堂の前で一礼するにとどめて、宿へと向った。

宿は那古寺から十分ほどの、海に近いところにあった。旅館組合の方が言う通り、新しい建物で、宿の人も親切で本当にいい民宿であった。部屋も希望通り十畳ほどの和室であった。

望み通りに、壁一面に朱印軸を掛け、その前に布団を敷いて眠ることとした。その軸を前に、布団に座りながら百観音巡拝の話になったが、どの霊場も想い出が多すぎて、何を語るのかが分からなかった。期せずして、「百観音巡拝はしみじみ大変なことなのだ。本当によく廻ることができた」という言葉が二人の口から出た。

最初は軸を前に、二人でおもいきり酒を呑もうということであったが、こうして百観音巡拝を終えた今は、語るべき言葉がなかった。酒も用意した焼酎の小瓶を半分ほど残して、布団の中に入るとそのまま眠ってしまった。南無観世音菩薩。本当に南無観世音菩薩であった。

## 九月三十日。巡拝七日目。快晴。

目覚めは早かった。壁には百観音巡拝成満の証である朱印軸が掛っている。しみじみと、昨晩とは違う感慨でその軸を眺めて煙草を吸った。Oさんはまだよく眠っていた。

宿を出た二人は、再び那古寺へ向かった。この辺りは房総半島南端にあり、どこか開放的で明るく、房総半島でありながら異った空気があった。海は少し風が出ていたが、海岸通りを吹き抜ける風は気持ちよかった。

那古寺の駐車場に着いたが、昨日とは全く異なる印象であった。当然ながら、朝の光の中で景色も輝いていた。今日は納経所には寄らず、直接本堂に向かった。

寺の山号でもある補陀洛とは観音様の住む地で、眺望よく、海を望んで花が咲き、鳥もさえずる極楽の境地を表すが、那古寺も高台から東京湾を見下ろす位置に、本堂が海に向って建っている。

登る途中の仁王門を入ると、右手に宝暦十一年（一七六一）建立の立派な多宝塔が建つ。木造

で大きく美しく、あまり類を見ないものである。その先が本堂であるが、すっぽりと覆われていて、外観を見ることはできなかった。前方に廻ると本堂入口のところは開いていて、そこから堂内に入って参拝となる。宝暦八年（一七五八）に再建された八間四面の大きな本堂であるが、全体を覆われているため、堂内は暗かった。中に入って線香を焚き灯明を灯し、心静かに経を読んだ。百観音最後の寺であり、これまでの寺々の本尊にも届けと、般若心経を三巻読んだ。

経を読んでいると、西国、秩父、坂東の三大観音霊場を、百観音を本当に巡拝したのだと、その成満できたことが不思議なことに思えるのであった。嬉しさより感謝の念の方が強かった。この成満を支えて下さった観音様に、そしてすべての方々に感謝したかった。参拝を終えて、本堂前や境内を散策しながら、百観音霊場巡拝の成満をかみしめていた。もう巡礼者は先へ急がなくてもいいのだと思うと、なぜか複雑な心境であった。

たずねきて潮みちるなり那古の寺

駄句が浮かんだが、最後に心をこめて那古寺の縁起にふれる。

那古寺は養老元年（七一七）、元正天皇が病気の時、行基がこの地で海からの香木を得て千手観音像を彫り、病気平癒を祈願すると、たちどころに天皇の病気が治った。そのことへの感謝として、勅願によって建立されたのか那古寺である。その後、慈覚大師がこの寺で修行したり、秀

円上人が密教の道場ともした。源頼朝は、石橋山の合戦に敗れたとき、この地に逃がれきて本尊に再興祈願をして、七堂伽藍を建てた。

足利尊氏、里見義実（さとみよしざね）などの帰依も篤く、大いに賑わったが、元禄の大地震によって堂宇は全壊し、そのうえ明治の廃仏毀釈などで領地の没収、再び関東大震災にみまわれるなど困難な時期があったが、多くの信者たちによって伽藍がととのえられてきた。

午前十時、那古寺を後にした。もう廻る寺はない。帰路があるだけである。再び内房の海岸線を上り、木更津へ向かう。木更津からは、私もOさんも初めて通る東京湾アクアラインを通った。通行料金が高いと問題になっている道であるが、海底を走り、アッという間に対岸の川崎市に着く。ともあれ大変便利な海底道路である。

Oさんはここから東名高速、名神高速と走り継いで、四国徳島へと帰るのである。私もできるだけ一緒にと、二人で海底トンネルをくぐったが、いよいよ別れる時がきた。東名高速に向って、都合のいいところで下車することにして、カーナビが検索すると、京浜急行大師線・川崎大師駅がでてきた。坂東三十三観音霊場巡拝の最後に、弘法大師と縁の深い川崎大師駅で別れるのも何かの仏縁と、駅頭での別れとなった。

別れの刻は一瞬にして来るものである。「ありがとう。さようなら。気を付けて」それしか言葉はないのである。

Oさんの車は一気に走りだすと、市街地の中で見えなくなった。四国徳島への長い距離を無事帰れますように、そして観音様のご加護をと祈りながら見送った。

地人館 E-books オンデマンド版
紙面のイメージは電子版と異なります。

酒本幸祐（さかもと　こうすけ）

948 年　徳島県生まれ。
1969 年　大阪府立八尾高校卒。
1970 年　東京の小出版社勤務。
1978 年　美術誌発刊のため出版社六月書房を設立。
1983 年　霊園情報誌『霊園ガイド』を創刊、今日に至る。

以降、霊園ガイドへ掲載のため全国の霊場、社寺の取材参拝を続けている。主に、四国八十八ヶ所霊場、秩父三十四観音霊場、西国三十三観音霊場、坂東三十三観音霊場を巡拝し百観音巡拝を達成。他に鎌倉三十三観音霊場、みちのく三十三観音霊場など、社寺巡拝は多く、近年は修験道に関心をもち、かつて修験道の盛んだった社寺を中心に取材参拝を続けている。

観音霊場巡拝記（かんのんれいじょうじゅんぱいき）3　坂東三十三札所（ばんどうさんじゅうさんふだしょ）

著者　酒本幸祐（さかもとこうすけ）

初版発行　2021 年 7 月 26 日

発行　地人館（ちじんかん）
〒 116-0014 東京都荒川区東日暮里 6-56-6 長戸ビル 3 階
Tel 03-6806-7937　Fax03-6806-7939
http://chijinkan.com/

印刷・製本　有限会社 朋栄ロジスティック

©2021 Kousuke Sakamoto